

# 態度が相反する他者への過度なバイアス認知を 錯視経験が緩和する効果<sup>1</sup>

神原 歩<sup>2</sup> 京都先端科学大学

Effects of experiencing visual illusions on susceptibility to biases in opponent's social judgments

Ayumi Kambara (Kyoto University of Advanced Science)

It has been shown that people tend to view opponents as biased. Recent theoretical studies showed that this tendency occurs due to naïve realism. People tend to be overconfident about their objectivity — they believe they see the world as it really is (Naïve realism: Ross & Ward, 1995) — hence, they assume that people who have a different view must be biased (Pronin et al., 2004). This study examines the effect of encountering clear demonstrations that personal sensory perceptions are not necessarily accurate on the perception of opponents' bias in their social judgment through exposure to visual illusions. A total of 87 participants were grouped by whether or not they experienced visual illusions. Participants who experienced visual illusions rated opponents as having fewer biases in their social judgments than participants who did not experience visual illusions. This suggested that a person's overconfidence in their own perception — “I see the world as it really is” — might be one of the causes of people's negative perception of opponents.

**Key words:** naïve realism, bias, visual illusion.

*The Japanese Journal of Psychology*

J-STAGE Advanced published date: January 31, 2021

私たちは日常生活の様々な状況において、自分と他者とは物事に対する捉え方が異なるということに気づくことがある。例えば、私は「優しい」と思っている人物を「優しくない」と判断する人に遭遇することもあれば、自分が正しいと信じている行いに対して、他者から批判を受けることもある。このような、ものの捉え方の相違は対人葛藤の一因となることが示されてきた（例えば、Gilovich & Savitsky, 1999）。

近年は、ものの捉え方の相違そのものが対人葛藤の原因となるわけではなく、その相違によって生じる偏見の認知が敵対的行動を促進していることが指摘され

ている（Kennedy & Pronin, 2008; Pronin, Kennedy, & Butsch, 2006）。そこで本研究は、態度が相反する他者に対してなぜ偏見の認知が生じるのかという視点から、その偏見の認知の緩和策について検討する。

## 態度が相反する他者への偏見の認知

人は、他者が自分とは相反するものの見方をしていることを知ると、その見方は、政治的立場（Cohen, 2003）や私的感情（Frantz, 2006）、自己利益（Reeder, Pryor, Wohl, & Griswell, 2005, study1, 2）の影響を受けて導かれたものであると捉える。そして、それら個々の要因の影響を受けていると捉えるに留まらず、それらの影響をおしなべて受けた、すなわち全般的にバイアスがかかった見方であると捉えることが示された（例えば、Kennedy & Pronin, 2008, study1; Robinson, Keltner, Ward, & Ross, 1995）。

更に、相反する見方それ自体をバイアスがかかっていると捉えるだけでなく、相反する見方をするその人に対して、バイアスがかかった見方をする人だ（例えば、自己利益を重んじ、利他精神に欠け、知識が浅く、

Correspondence concerning this article should be sent to: Ayumi Kambara, Department of Psychology, Faculty of Humanities, Kyoto University of Advanced Science, Gotanda-cho, Yamanouchi, Ukyo-ku, Kyoto 615-8577, Japan. (E-mail: ayumi.kambara@gmail.com)

<sup>1</sup> 本研究の結果の一部は認知心理学第10回大会で発表された。

<sup>2</sup> 本調査の企画から実施にあたって、遠藤 由美先生（関西大学社会学部）に多大なるご指導、ご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

不合理的な判断をする)という印象を抱くことが報告されている(Reeder, et al.,2005, study4)。そして、その傾向はそのひとの見方が自分の見方と相反する程度が大きいほど強くなることが示されている(Pronin, Gilovich, & Ross, 2004)。これまでも、自己と比べて一般的他者はバイアスがかかった見方をしていると捉える傾向が示されてきたが(Pronin, Lin, & Ross, 2002)、これらの研究により他者の中でも、自分と同じ見方の他者をバイアスがかかっているとみなすのではなく、相反する見方をする他者をバイアスがかかっているとみなすことが示されたといえる。

ただし、同じ見方をする人(以下、同一態度の他者とする)と相反する見方をする人(以下、相反態度の他者とする)というのは、絶対的なものではない。誰から見ると、相反態度の他者であるか同一態度の他者であるかは入れ替わるものである。したがって、「相反態度の他者」が、「同一態度の他者」よりバイアスがかかった見方をしているということは論理的に生じ得ない。そこで本稿では、同一態度の他者より相反態度の他者をバイアスがかかった見方をしていると捉える傾向を、偏見的認知の一種として、態度の相違による過度なバイアス認知と呼ぶことにする。

### 相反態度の他者に偏見的認知が生じる原因

相反態度の他者をネガティブに評価する傾向が生じる1つの原因として、自己高揚動機が存在が挙げられることが多かった(例えば, Armor, 1998; Reeder et al., 2005)。それと同時に、相反態度の他者に対して過度なバイアス認知が生じる原因として、自己の客観性についての信念の存在が指摘されている(for a review, Pronin et al., 2004)。人には自分の認知や判断を自らの「主観」ではなく「客観的事実の反映」であると信じる傾向(Naïve realism: Ross & Ward, 1995)があり、それによって相反態度の他者に対する過度なバイアス認知が生じているという。詳しくは次のとおりである。

ナープ・リアリズム理論では、認知や判断などの主観的経験と主観的経験を生起させた対象の特性との関係が以下の3つの信念を基に成り立っていると一人称を用いて述べている。私は、物理的事物もしくは出来事などの対象について、客観的事実をありのまま受けとめている。私の態度・信条などは自分の個人的感情や偏見などの影響を受けず、情報や証拠をありのままに捉えた結果として生じたものである(第1の信念)。従って、理性的な普通の人は、概して私と同じ見方をする(第2の信念)。私と同じ見方に至らない、つまり相反する見方をする人がいた場合は、その人は私と異なる情報に触れているのか、客観的に事実を見る姿勢もしくは能力に欠けているのか、個人的要因(政治的思想や興味関心、その他個人的理由)の影響を受けて判断をしている(第3の信念)(Ross & Ward, 1995)。

この理論に従えば、過度なバイアス認知が生じるのは、ナープ・リアリズム理論の第1の信念、人は自分の認知・判断が主観的なものに過ぎないことに自覚が無く、客観的事実の反映であると信じていることが原因である。客観的事実とは唯一無二のものであるから、自分の捉え方を客観的事実の反映だと信ずれば、自分の捉え方と異なるものは事実の反映ではあり得ない。したがって、客観的事実以外の何かの影響を受けたもの、すなわちバイアスがかかった見方をしているはずだと捉えるということである。そうであるなら、ナープ・リアリズム理論の第1の信念「私は世の中をありのままに捉えている」が揺らげば、自分の見方も唯一の正解とは捉えられなくなるから、自分の見方と異なるからという理由だけで生じる「異なる見方は歪んでいるはず」という決めつけ、すなわち相反する他者への過度なバイアス認知は緩和すると考えられる。

言うまでもなく、人の認知や判断は対象の客観的事実をありのままに反映した結果というより、その人の立場・状況や願望等の影響を受けて形成された主観的なものである(例えば, Kunda, 1990)。それにも関わらず、自分の認知・判断を客観的事実の反映であると、人はなぜ信じているのだろうか。これまでの理論的検討を概観すると、以下の2つが考えられる。

まず、日常生活において、自分が世の中をありのままに見ていないということを明示する事実と直面する機会が殆どないことが挙げられる。人の認知には、単純な物理的知覚から、複雑な社会的判断まで様々なレベルがある。例えば、社会的判断などはあまりに複雑で、何が正しく何が誤りであるか不明瞭なものである。自分と判断が異なる人に遭遇したとしても、人は自分の判断と相入れない情報の妥当性を低く見積もるから(確証バイアス: Lord, Ross, & Lepper, 1979)、自分の判断の不正確さや誤りに直面することは少ない。また一方、物理的事物を対象とした知覚に限っては、自分が「ありのままに」外界を捉えていると信じて、支障をきたすことがない(石井, 2005; Pronin et al., 2004)。それどころか、むしろ自分の目を疑っては生活がままならない。自分の目に見えた物体が実際は存在しないということではなく、また他者も同じように見えると同意する。このように、日常では物理的知覚を信じて生活している。日々のこのような経験の繰り返し、より複雑な社会的判断の過信にも汎化している可能性が指摘されている(Pronin et al., 2004)。

次に、認知を構成する情報処理過程が無意識・自動的であることであることもまた、自分の捉え方が客観的事実そのものの反映ではないことに気づきにくい原因であると指摘されている(Pronin & Kugler, 2007)。どのレベルの認知についても、外界から刺激が入力されて、刺激から認知を構成する間に複雑な情報処理過程がある。ただ、その情報処理過程は完全に無意識的・

自動的である。それが故に、人は自分の認知が刺激の特性そのものであると捉え、情報処理過程でバイアスが かかっていることを自覚し難いという (Nisbett & Wilson, 1977)。物理的な刺激と知覚との明確なズレに直面することにより情報処理過程の存在に気づく可能性を、Banaji & Greenwald (2013, p.5) は「それ (錯視) は、そのほとんどが自動的、無意識的、無意図的に行われている心のシグナル伝達過程の鮮明な描写である」と指摘している。

以上の指摘を踏まえて、近年、自分の知覚が必ずしも外界の正しい反映ではないという事実直面することで、自分の判断にバイアスが かかっている可能性 (以下、バイアス認知とする) に自覚が高まるかを検討した研究が散見される。まず、Pronin & Kugler (2007) は、認知を形作る、無意識の見えない力についての説明記事を読むことで、自分の判断のバイアス認知が高まることを示した。また、Kambara (2017) は、自分の知覚が必ずしも外界の正しい反映ではないことを明示する刺激として錯視を用いて、錯視経験が自分の判断のバイアス認知に与える影響を検討した。そして、錯視を経験した人はそうでない人よりも、自分の判断のバイアス認知が高いことを示した。神原 (2015) は、自分の視野に存在する事物を見過ごす経験、すなわち自分の知覚が必ずしも外界の正しい反映ではないことを示す刺激の呈示が (The original selective attention task: Simons, 1999)、自己の様々な性格特性の認知に与える影響を調べた。そして、そのような経験により「客観的である」という性格特性についての自己評定が低くなること、一方、客観性以外の性格特性 (「容姿が良い」、「思いやりがある」など) の自己評定には影響が認められないことを報告している。

## 本研究の目的と仮説

先述のナイーブ・リアリズム理論によると、相反態度の他者は歪んだ見方をしているはずだという過度なバイアス認知は、自分の見方を唯一無二の客観的事実の反映であると信じているがために生じるとされている。すなわち、相反態度の他者の見方は、(客観的事実の反映である) 自分の見方と異なるから、客観的事実の反映ではあり得ない、と捉えるというわけである。そうであるなら、自分の知覚が必ずしも客観的事実の反映ではないことを示す事実直面すると、自分の見方とは異なるという理由だけで、その見方が客観的事実の反映ではあり得ないという決めつけは生じなくなる。結果として態度の相違による過度なバイアス認知は緩和されるだろう。

本研究では、自分の知覚が必ずしも外界の正しい反映ではないということ (以下、知覚の不確かさとする) を示す刺激として、「実在する対象の真の特性とは異なる知覚 (北岡, 2008)」である錯視を用いる。そして、

錯視経験が過度なバイアス認知を緩和するか否かを検討することを目的とする。それを通じて、過度なバイアス認知が少なくとも部分的に認知的要因によって生じているかを同時に確認することができる。なぜなら過度なバイアス認知は、自分や自分の内集団を肯定的なものとして捉えたいという自己高揚動機によって生じている可能性も理論的に指摘されてきたからである (Armor, 1998; Reeder et al., 2005)。そこでもし、相反態度の他者への過度なバイアス認知が、錯視経験によって幾らか緩和されるなら、過度なバイアス認知は少なくとも部分的には認知的要因によって生じていると考えられる。動機的要因のみで生じているなら、錯視の影響を受けないからである。

具体的な刺激としては、錯視の中でも、Kambara (2017) で用いた刺激と同様に、紙に印刷された動く錯視を採用した。動く錯視とは、静止画が色の対比効果や形によって、あたかも動いているように見える錯視である (Goldstein & Brockmole, 2016)。「静止している」という紙の特性と、「動いている」という見え方に差異を感じると、参加者は自分の知覚は対象の物理的特性の正しい反映ではないことに自ら気づく (錯視画-紙上条件)。加えて、対象の特性とは異なる知覚を経験しない統制条件として、本錯視画と色形は類似したものであるが錯視画ではない統制画を紙に印刷したものを呈示する条件 (統制画-紙上条件) を設けた。

但し、錯視画の有無の操作だけでは、バイアス認知の程度に影響を与えたのが、錯視経験の有無なのか、錯視画呈示の有無なのか特定することができない。そこで、錯視画呈示の有無の効果であるという代替解釈を確認するために、動く錯視画をモニター上で呈示する条件を加える (錯視画-モニター条件)。モニター上に動く錯視画を呈示すると、参加者はモニター上で動く (動いているように見える) 画像を目にすることになる。紙に印刷された画像が動いて見えると、参加者は自分の物理的知覚がその画像の物理的特性を反映していないことに気づくと考えられるが、モニター上の画像が動いているように見えても、その画像の物理的特性を反映していないとは感じない。つまり知覚の不確かさを経験しないと考えられる。

同一態度の他者と相反態度の他者の操作として、3つの社会問題を取り上げ、参加者の意見を問う。そしてそれら3つの社会問題の中で、最も参加者の関心が高い問題の選択を求める。その最も関心の高い問題について、半分の参加者には、自分と同じ意見の人 (同一態度の他者条件)、残り半分の人には自分とは反対意見の人 (相反態度の他者条件) を想起させる。手続きの順序としては、社会問題についての意見を問い、続いて錯視経験の操作の直後に、同一態度の他者もしくは相反態度の他者に対するバイアス認知を測定する。

Pronin et al. (2004) によると、同一態度の他者に対

するバイアス認知は、自己の判断に対するバイアス認知と同程度であることが示されている。ナイーブ・リアリズム理論から考えても、客観的事実をありのままに反映した自分の判断と同じ判断をする人は、自分と同程度にバイアスがかかっていない判断をしているはずだと捉えられるだろう。

加えて自己の判断に対するバイアス認知は知覚の不確かさに直面する経験により高まる (Kambara, 2017) から、同一態度の他者の社会的判断に対するバイアス認知も錯視経験により高まると予想した。なぜなら、通常時は、同一態度の他者は自分と同じ見方をしているから、自分と同じくらいありのままを見ていると捉えているが、自分が客観的事実をありのままに見ているかが不明瞭になると、自分と同じ判断をする人もまた客観的事実をありのままに見ているのか不明瞭になるからである。

また繰り返しになるが、相反態度の他者に対する過度なバイアス認知は、ナイーブ・リアリズム理論によると自己の見方を唯一無二の客観的事実のありのままの反映であると捉えているがゆえ、それ以外の認知・判断は客観的な事実の反映だと捉えることができないことによって生じているとされている。すなわち「自分の見方 = 客観的事実の反映」があって、「自分の見方以外 (異なる見方) ≠ 客観的事実の反映」という決めつけが生じるというわけである。そうであるなら、「自分の見方 = 客観的事実の反映」という構図が崩れると、異なる見方は客観的事実の反映ではあり得ない、という認識も生じなくなる。自分の判断も異なる判断も、客観的事実の反映であるのか、全てが不明瞭になるからである。従って、本研究の仮説は以下のとおりとなる。

まず、錯視経験無し、すなわち通常時は相反態度の他者に対するバイアス認知は同一態度の他者に対するバイアス認知より高い (Kennedy & Pronin, 2008) ことから、仮説 1「統制画-紙上条件では、相反態度の他者に対するバイアス認知は同一態度の他者に対するバイアス認知より高いだろう。」と設定する。

そして、錯視経験によって自己の判断のバイアス認知が高まることから (Kambara, 2017)、仮説 2 として「錯視画-紙上条件では統制画-紙上条件より、相反態度の他者に対するバイアス認知は低く、同一態度の他者に対するバイアス認知は高いだろう。結果として、相反態度の他者と同一態度の他者のバイアス認知の差が緩和されるだろう。」と設定する。

最後に、モニター上の錯視画の呈示は知覚の不確かさに直面する経験ではないから、相反態度の他者についてのバイアス認知にも、同一態度の他者についてのバイアス認知にも影響を与えない。したがって、仮説 3 として、「錯視画-モニター上条件では、統制画-紙上条件と同様に、相反態度の他者に対するバイアス認

知が、同一態度の他者に対するバイアス認知より高いだろう。」と設定した。

## 方 法

### 実験参加者

関西の私立大学の大学生 87 名 (男性:40 名, 女性:47 名) であった。

### 実験デザイン

対象者 (同一態度の他者・相反態度の他者) × 呈示刺激 (統制画-紙上・錯視画-紙上・錯視画-モニター上) の 2 要因 6 条件の参加者間要因計画であった。

### 手続き

本実験は、3—4 名の小集団で実施した。各参加者を互いの質問用紙が見えない位置に着席させた。

**意見の選択** 社会問題に関する意識調査であると伝え、3つの社会問題 (死刑制度の存続, 原子力発電所の増設, 裁判員制度の導入) について、自分の意見を「賛成」、「反対」から選択するよう求めた。

**画像の呈示** 次に、これから画像と人の印象評価についての調査を行うと伝え、錯視画-紙上条件と統制画-紙上条件の参加者には、表紙とそれに続く 3 枚の A4 サイズの用紙のセットを配布した。その後、実験者の合図で表紙をめくり、次ページ以降の紙に印刷された画像を順番に注視するよう教示した。画像は、紙 1 枚に 1 つずつ印刷されており、合計 3 つであった。各画像の呈示時間は 40 秒であった。配布した紙には、錯視画-紙上条件では、動く錯視 (静止画であるが、動いて見える錯視) である「サクラソウの畑」(北岡, 2002), 「ローラー」(北岡, 2004), 「もみもみ」(北岡, 2011) の 3 つの錯視画 (付録 A) が、統制画-紙上条件では各錯視画と色形は類似したものであるが錯視ではない 3 つの統制画 (付録 B) が印刷されていた。錯視画-モニター上条件では、錯視画-紙上条件で呈示した錯視画をコンピュータディスプレイ上 (13 インチ Mac Book Air) で呈示した。画像についての評価は、次に配布する質問紙の最後のページで回答を求めると告げた。

**バイアス認知の測定** 続いて参加者に、人の印象評価についての調査を行うと告げ、質問紙への回答を求めた。質問紙は 2 つのパートから成り立っており、1 つめのパートでは、手続き 1 で回答した 3 つの社会問題から最も関心がある社会問題について選択を求めた。2 つめのパートでは日常生活で人がよく示すバイアス 7 項目についての説明が記述されていた。これら 7 つのバイアスは、「バイアス」という言葉は用いず、「傾向」として説明文に記されていた (ハロー効果, 利己的帰属等, Pronin et al. (2002) に準じた。説明文

は付録Cに掲載した)。

同一態度の他者条件では関心があると選んだ社会問題において同じ態度を示した人を、相反態度の他者条件では自分と反対の態度を示した人を想像するように求めた。そして、各項目の記述にその人が当てはまる程度を「全く当てはまらない (1)」—「非常によく当てはまる (9)」の9段階で評定を求めた。

**実験後調査** 最後に、次の2項目への回答を求めた。まず、呈示された画像の見え方について、「止まっているように見えた」、「どちらともいえない」、「動いているように見えた」から1つ選択し、次に画像の見え方(動いているように見えた人は動いて見えたことに、止まっているように見えた人は止まっているように見えたこと)について驚いた程度を「全く驚かなかった (1)」—「非常に驚いた (5)」の5段階で評定するように求めた。

## 結果

全参加者のうち、実験後のインタビューで、2つの実験に関連があると気づいたと回答した参加者2名、および回答に不備があった参加者3名、また統制画-紙上条件で使用した統制画を「動いているように見えた」と評価した参加者3名、錯視画-紙上条件で錯視画が「止まっているように見えた」と回答した参加者1名を除外し、合計78名を分析対象とした。各条件の参加者は、統制画-紙上-同一態度の他者条件12名、錯視画-紙上-同一態度の他者条件12名、錯視画-モニター上-同一態度の他者条件13名、統制画-紙上-相反態度の他者条件13名、錯視画-紙上-相反態度の他者条件15名、錯視画-モニター上-相反態度の他者条件13名であった。

## 操作チェック

各呈示刺激が意図した通りの感情を参加者にもたら

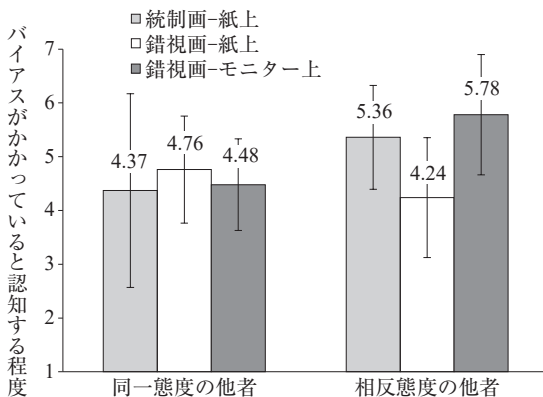


Figure 1. 他者の判断のバイアス認知に錯視経験が与える影響。

注) エラーバーは、標準偏差を示す。

したか(紙上の画像が動いて見えることは人に驚きをもたらすが、モニター上の画像が動いて見えることや、統制画は驚きをもたらさないこと)を確認するために、呈示された画像がもたらした驚きの程度について一要因の分散分析を行ったところ、呈示刺激要因の効果が有意であった ( $F(2, 75) = 30.71, p = .00$ )。Tukey の HSD 検定による多重比較検定の結果、驚きの程度の平均値は、統制画-紙上条件 ( $M = 1.32, SD = 0.56$ ) と比べて錯視画-モニター上条件 ( $M = 2.15, SD = 1.19$ ) と錯視画-紙上条件 ( $M = 3.56, SD = 1.22$ ) においてそれぞれ有意に高く(順に、 $p = .02, p = .00$ )、また錯視画-モニター上条件と比べて錯視画-紙上条件において有意に高かった ( $p = .00$ )<sup>3</sup>。

## 従属変数

バイアス7項目は特段の問題がない水準の内的整合性を示した ( $\alpha = .71$ ) ので、平均値をバイアス認知得点とした。バイアス認知得点に対し、2 (対象者: 同一態度の他者・相反態度の他者)  $\times$  3 (呈示刺激: 統制画-紙上・錯視画-紙上・錯視画-モニター上) の分散分析を行った。結果を Figure 1 に示した。他者の意見の主効果が有意であり ( $F(1, 72) = 4.90, p = .03, \eta^2 = .06$ )、また2要因の交互作用が有意であった ( $F(2, 72) = 4.56, p = .01, \eta^2 = .11$ )。

そこで、呈示刺激要因の単純主効果の検定を行ったところ、相反態度の他者を想起した群内で呈示刺激要因の効果が有意であり ( $F(2, 72) = 6.57, p = .00, \eta^2 = 0.15$ )、ボンフェローニの多重比較検定の結果、相反態度の他者に対するバイアス認知得点は錯視画-紙上条件 ( $M = 4.24, SD = 1.11$ ) で、統制画-紙上条件 ( $M = 5.36, SD = 0.96$ ) と錯視画-モニター上条件 ( $M = 5.78, SD = 1.12$ ) より、それぞれ低かった(順に、 $p = .04; p = .00$ )。他方、同一態度の他者を想起した群では、呈示刺激の効果は見られなかった ( $F(2, 72) = 0.36, p = 0.70$ ; 統制画-紙上:  $M = 4.37, SD = 1.80$ ; 錯視画-紙上:  $M = 4.76, SD = 0.99$ ; 錯視画-モニター上:  $M = 4.48, SD = 0.85$ )。

次に、対象要因の単純主効果の検定を行ったところ、統制画-紙上条件 (同一態度の他者:  $M = 4.37, SD = 1.80$ ; 相反態度の他者:  $M = 5.36, SD = 0.96$ )、錯視画-モニター上条件 (同一態度の他者:  $M = 4.48, SD = 0.85$ ; 相反態度の他者:  $M = 5.78, SD = 1.12$ ) とともに対象要因の効果が有意であり (統制画-紙上条件:

<sup>3</sup> 錯視画-モニター上条件は、統制画-紙上条件より驚きの程度が有意に高かったため ( $p < .05$ )、錯視画はモニター上であっても、統制画よりは驚きをもたらした可能性が考えられる。そこで、1 サンプル  $t$  検定で確認をしたところ、錯視画-モニター上条件の驚きの程度は「どちらともいえない (3)」より値が小さかったため ( $t(25) = 3.64, p < .01$ )、意図通り錯視画-紙上条件でのみ驚きが生じたと判断した。

$F(1, 72) = 4.49, p = .04, \eta^2 = .06$ ; 錯視画-モニター上条件:  $F(1, 72) = 7.96, p = .00, \eta^2 = 0.10$ ), 両条件のバイアス認知得点は, 相反態度の他者条件において同一態度の他者条件より高かったが, 錯視画-紙上条件では, 対象要因の効果は認められなかった ( $F(1, 72) = 1.33, p = 0.25, \eta^2 = 0.02$ ; 同一態度の他者:  $M = 4.76, SD = 0.99$ ; 相反態度の他者:  $M = 4.24, SD = 1.11$ ).

## 考 察

本研究は, まず同一態度の他者と相反態度の他者に対するのではバイアス認知に差異が生じるという先行研究の結果(例えば, Kennedy & Pronin, 2008; Pronin et al., 2004)を確認した。そして, 知覚の不確かさに直面する経験が, 相反態度の他者, 同一態度の他者に対するバイアス認知に与える影響を検討した。

本研究の結果から, 統制画-紙上条件において, 相反態度の他者に対するバイアス認知は, 同一態度の他者に対するバイアス認知より高かった。仮説1は支持され, 錯視経験無しの場合は, 同一態度の他者より相反態度の他者へのバイアス認知が高いことが示された。

また錯視画-紙上条件では統制画-紙上条件より, 相反態度の他者に対するバイアス認知が低かった。更に, 錯視画-紙上条件では相反態度の他者と同一態度の他者のバイアス認知の差は消滅した。但し, 同一態度の他者に対するバイアス認知には差異がみとめられなかったことは, 仮説とは異なる結果であった。仮説2は部分的に支持されたといえる。錯視画-モニター上条件では, 統制画-紙上条件と同様に, 相反態度の他者に対するバイアス認知が同一態度の他者に対するバイアス認知より高かった。仮説3は支持され, 錯視画-紙上条件の効果は, 単純に錯視画を目にしたことによる効果ではなく, 知覚の不確かさに直面したことによる効果であると考えられた。

次に, 仮説とは異なる結果であった, 知覚の不確かさに直面する経験が同一態度の他者に対するバイアス認知を高めなかったことについて考察する。知覚の不確かさに直面する経験によって同一態度の他者に対するバイアス認知が高まるという仮説は, 知覚の不確かさに直面する経験は自己と同一視している同一態度の他者に対するバイアス認知も高めるだろうという考えのもと立てられていた。まず考えられるのは, 本研究の手続きでは, 同一態度の他者に対して同一視が生じなかったため, 知覚の不確かさに直面する経験が同一態度の他者に対するバイアス認知に影響を与えなかったという可能性である。

同一視が生じなかった原因として2つの可能性が考えられる。1つは, 本研究の同一態度の他者の操作的定義である。本研究における同一態度の他者の操作的定義は, 2者択一課題で同じ意見を選んだ人であった。一方, 同一態度の他者と自己判断のバイアス認知が同

程度であるという結果を示した Pronin et al. (2004) における同一態度の他者の操作的定義は, 5者択一課題で同じ意見を選んだ人であった。2者択一で同じ意見を選んだ人に対してより, 5者択一で同じ意見を選んだ人に対しての方が, 自分と同一視しやすいだろう。

もう1つは, 扱った社会問題に対する参加者の関心度合いの影響である。Pronin et al. (2004) は, 9.11 後「アフガニスタンに対して米国がとるべき態度」についての意見の一致度で同一態度の他者を定義しているのに対し, 本研究では, 「死刑制度の廃止」, 「墮胎の禁止」など抽象的な問題についての意見の一致度で同一態度の他者を定義した。従って, Pronin et al. (2004) より本研究の意見選択の方が参加者にとっての関与度が低く, 同じ意見を持つ人に十分な同一視が生じなかった可能性が考えられる。この見解は, Pronin et al. (2004) では自己と同一態度の他者とのバイアス認知が同程度であるのに対し, 本研究における統制画-紙上-同一態度の他者条件の結果が, Kambara (2017) の統制画-自己条件より高いこととも一貫している。

また, 本研究では, Reeder et al. (2005, study4) に準じて, 同一・相反態度の他者についての想起を, 社会問題に対する態度以外の条件を限定せずに行った。その結果として, ある人は意見の合わない友人を, ある人は自分とは相入れない価値観を明示している有名人を想起したかもしれない。Kennedy & Pronin (2008) のように, 架空の意見論述を呈示する方法で相反態度の他者を限定した例に比べて, 想起する他者の, 社会問題への態度以外の点におけるばらつきが大きかった可能性が拭えない。また更に, 同一・相反態度の他者は, 想起のしやすさに違いがあった可能性もある。いずれにしても, 本研究の結果だけを用いて, これらの解釈について断定することはできない。今後, 同一・相反する態度の他者の操作的定義を変更し, 更なる検討が必要であろう。

意見の対立によるネガティブな影響の緩和策は, これまでも盛んに研究がなされてきた。それらの研究の中で, 本研究の位置付けを以下に考察する。従来の研究の多くは, 自分とは異なる意見の正当性を考えるなど, 実験操作によって自分とは異なる見方の理解を深める試みであった(例えば, Batson, 1991; Davis, Conklin, Smith, & Luce, 1996; Galinsky, & Moskowitz, 2000)。それらに対し本研究は, 従来用いられた, 相手の見方に対する理解を深めるという視点ではなく, 自分の見方の不確かさに気づきをもたらすという視点から意見の相違によるネガティブな影響を緩和する試みであったといえる。

また, 意見の不一致から生じるネガティブな影響を, 自分自身の認知や判断の再考を促すことによって低減を試みた研究の中では, 次のように位置づけられるであろう。従来の試みは, 自分自身の意見の弱点を記述

するよう求める等、実験操作によって、自分自身の主張内容の再検討を促すものであった（例えば、Koriat, Lichtenstein, & Fischhoff, 1980; Lord, Lepper, & Preston, 1984）。それに対し本研究は、人が自分の見方をありのままの反映であると信じ、また異なる見方をする他者をなぜ受け入れ難いのか、その根底のメカニズムに着目した。そして、議論の内容そのものとは全く関係がない要因によって、意見の不一致による偏見的認知を低減する方法を示唆したといえるだろう。

最後に、態度の相違による過度なバイアス認知が生じる原因について考察する。本研究の結果から、態度の相違による過度なバイアス認知の少なくとも一部は、日々の生活の中で培われた客観性についての信念によって生じていると考えられ、Pronin et al. (2004) の考えを支持したといえる。相反態度の他者はバイアスがかかっているという認識は、争いの一因である (Kennedy & Pronin, 2008; Pronin et al., 2006) ことを踏まえると、私たちは特別な動機はもたずとも、日々目にしたものを信じて生活をしているというだけで、自分とは異なる見方をする他者に対して否定的な印象を抱き、人と人との争いを引き起こしていることを示唆したといえる。

## 本研究の制約と今後の展望

本研究の制約を3点述べる。まず1点目は、知覚の不確かさに直面する経験と自己および同じ/相反態度の他者に対するバイアス認知との関係が直接明らかになっていない点である。本研究では、対象の判断についてのバイアス認知の増減は、知覚の不確かさに直面することにより生じていると仮定している。しかし、同一態度の他者・相反態度の他者に対するバイアス認知の変化が、知覚の不確かさへの直面によるものであることは直接示されていない。従って、本研究の結果をより強固なものとして示すには、物理的知覚の客観性についての認知、対象の判断の客観性についての認知など、各指標の関係を明らかにする必要があるだろう。

2点目は、錯視経験の影響力の大きさについてである。本研究では一般的な社会問題を用いたが、例えば Pronin et al. (2004) で扱った問題のように、参加者の関与度が高く、かつ強固な態度が構築されている場合は、相反態度の他者への偏見的認知が本研究より頑強であることが予想される。そのような場合、相反態度の他者への認知は、錯視経験の影響を受けない可能性もある。また社会心理学に関する知識、例えば認知バイアスの存在を知っているかなども、本研究の結果に影響を与えるものと考えられる。本研究で認められた、錯視経験が相反態度の他者に対するバイアス認知に与える影響は、扱う問題への関与度や事前知識などによって限定される可能性があることにも留意が必要である。

3点目は錯視経験の効果の持続性についてである。知覚の不確かさに直面する経験を一度経験すると「私は世の中をありのままに見ている」という信念が揺らぎ、それが回復しないという仮定は、多くの人は既に「私は世の中をありのままに見ている」という信念を喪失しているという非現実的な推測を生む。従って、「私は世の中をありのままに見ている」という信念は素早く、もしくは一定の期間を経て回復するものであると考えられる。本研究では、知覚の不確かさに直面する経験の直後にバイアス認知の評定を行ったためその効果が見られた。但し、錯視経験とバイアス認知の評定との間に他のタスクを差し挟む、もしくは単純に間を空けることによってその効果が現れないという可能性も考えられる。今後はその効果の持続性を含めた検討が必要であろう。

最後に今後の展望を述べる。本研究を偏見的認知の緩和策の検討の1つとして捉えるなら以下のように考えられる。偏見的認知の抑制については膨大な研究がなされ、意識的な抑制は後にリバウンドをもたらしることが指摘されている（例えば、Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994）。一方、本実験後の確認で、2つの実験の関連性に気付いたのは結果から除外した2名のみであった。錯視経験が他者認知に影響を及ぼす過程に参加者は無自覚、すなわち意識的な抑制を介しなかったと考えられる。したがって、他の偏見的認知の緩和策とそのリバウンド効果を比較することにより、偏見的認知を弊害なく解消する方法を探る足がかりとなる可能性がある。

近年、「私は世の中をありのままに見ている」と信ずる程度は、相反態度の他者への偏見的認知に影響を与えるだけでなく、自分とは異なる意見を取り入れる程度にも影響を与えることが報告されている (Lieberman, Minson, Bryan & Ross, 2012)。今後は、知覚の不確かさに直面する経験の生起が、他者の印象という認知レベルに対してだけでなく、他者への対応という行動レベルに対して与える影響についての検討も求められるだろう。

## 利益相反について

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 引用文献

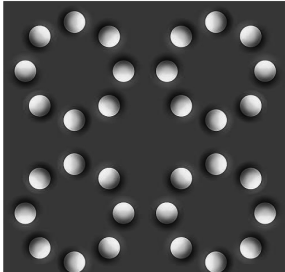
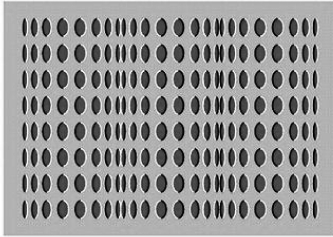
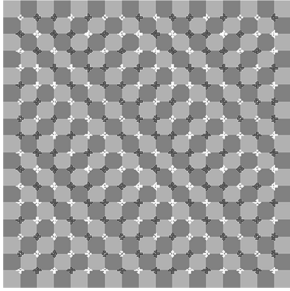
- Armor, D. A. (1998). *The illusion of objectivity: A bias in the perception of freedom from bias* (Unpublished doctoral dissertation). University of California, Los Angeles.
- Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2013). *Blindspot: Hidden biases of good people*. New York, NY: Delacorte

- Press.
- Batson, C. D. (1991). *The altruism question: Toward a social psychological answer*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Cohen, G. L. (2003). Party over policy: The dominating impact of group influence on political beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 808–822.
- Davis, M. H., Conklin, L., Smith, A., & Luce, C. (1996). Effect of perspective taking on the cognitive representation of persons: A merging of self and other. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 713–726.
- Frantz, C. M. (2006). I am being fair: The bias blind spot as a stumbling block to seeing both sides. *Basic and Applied Social Psychology*, 28, 157–167.
- Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2000). Perspective-taking: Decreasing stereotype expression, stereotype accessibility, and in-group favoritism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 708–724.
- Gilovich, T., & Savitsky, K. (1999). The spotlight effect and the illusion of transparency: Egocentric assessments of how we're seen by others. *Current Directions in Psychological Science*, 8, 165–168.
- Goldstein, E. B., & Brockmole, J. (2016). *Sensation and perception*. Boston, MA: Cengage Learning.
- 石井 徹 (2005). 常識の規範的影響について 社会心理学研究, 20, 224–252.
- 神原 歩 (2015). 知覚の不確かさへの気付きが自己の客観性認知に与える影響の検討 日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集, 136.
- Kambara, A. (2017). Effects of experiencing visual illusions and susceptibility to biases in one's social judgments. *SAGE Open*, 7(4), 1–6. <https://doi.org/10.1177/2158244017745937>
- Kennedy, K. A., & Pronin, E. (2008). When disagreement gets ugly: Perceptions of bias and the escalation of conflict. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 833–848.
- 北岡 明佳 (2002). サクラソウの畑 北岡明佳の錯視のページ Retrieved from <http://www.ritsumeai.ac.jp/~akitaoka> (2019 年 9 月 14 日)
- 北岡 明佳 (2004). ローラー 北岡明佳の錯視のページ Retrieved from <http://www.ritsumeai.ac.jp/~akitaoka> (2019 年 9 月 14 日)
- 北岡 明佳 (2008). 錯視の認知心理学 認知心理学研究, 5, 177–185.
- 北岡 明佳 (2011). もみもみ 北岡明佳の錯視のページ Retrieved from <http://www.psy.ritsumeai.ac.jp/~akitaoka/iroiro7.html> (2019 年 9 月 14 日)
- Koriat, A., Lichtensteins, S., & Fischhoff, B. (1980). Reasons for confidence. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 6, 107–118.
- Kunda, Z. (1990). The case for motivated reasoning. *Psychological Bulletin*, 108, 480–498.
- Liberman, V., Minson, J. A., Bryan, C. J., & Ross, L., (2012). Naïve realism and capturing the “wisdom of dyads.” *Journal of Experimental Social Psychology*, 48, 507–512.
- Lord, C. O., Lepper, M. R., & Preston, E. (1984). Considering the opposite: A corrective strategy for social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1231–1243.
- Lord, C. G., Ross, L., & Lepper, M. R. (1979). Biased assimilation and attitude polarization: The effects of prior theories on subsequently considered evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 2098–2109.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back insight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 808–817.
- Nisbett, R. E., & Wilson, T. D. (1977). Telling more than we can know: Verbal reports on mental processes. *Psychological Review*, 8, 231–259.
- Pronin, E., Gilovich, T., & Ross, L. (2004). Objectivity in the eye of the beholders: Divergent perceptions of bias in self versus others. *Psychological Review*, 111, 781–799.
- Pronin, E., Kennedy, K., & Butsch, S. (2006). Bombing versus negotiating: How preferences for combating terrorism are affected by perceived terrorist rationality. *Basic and Applied Social Psychology*, 28, 385–392.
- Pronin, E., & Kugler, M. B. (2007). Valuing thoughts, ignoring behavior: The introspection illusion as a source of the bias blind spot. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 565–578.
- Pronin, E., Lin, D. Y., & Ross, L. (2002). The bias blind spot: Perceptions of bias in self versus others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 369–381.
- Reeder, G. D., Pryor, J. B., Wohl, M. J., & Griswell, M. L. (2005). On attributing negative motives to others who disagree with our opinions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 1498–1510.
- Robinson, R. J., Keltner, D., Ward, A., & Ross, L. (1995). Actual versus assumed differences in construal: “Naive realism” in intergroup perception and conflict. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 404–417.
- Ross, L., & Ward, A. (1995). Psychological barriers to dispute resolution. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 27, pp. 255–304). San Diego, CA: Academic Press.
- Simons, D. H. (1999). The original selective attention task, the invisible gorilla. Retrieved from <http://www.theinvisiblegorilla.com/biographies.html> (July 4, 2020)



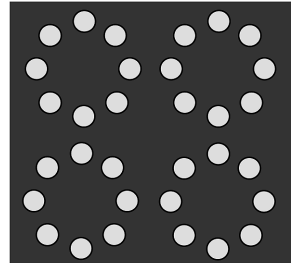
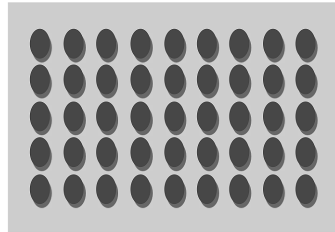
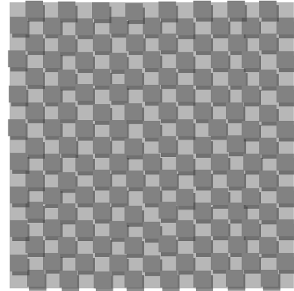
## 付録A

錯視画条件で呈示した画像



## 付録B

統制画条件で呈示した画像



注) これらの画像は北岡 明佳先生 (立命館大学) に許可を頂き、掲載をした。

## 付録C

### 日常生活で人がよく示す傾向 (バイアス) 7項目についての説明文

- ・自分の信念に合う情報は受け入れるが、自分の信念に矛盾する情報は否定する。
- ・意見の内容が同じであったとしても、仲間が言うより、交渉相手や対抗相手が言った場合に、その意見の正当性を低く評価する。
- ・1つ望ましい (もしくは望ましくない) 特徴を持っている人を見ると、事実の確認無しに、その人は全体として望ましい (望ましくない) 人なのだろうと推測する。
- ・他者の惨事は、本人の行いに原因があったと考えるが、自分の惨事は、状況や周囲が原因となって生じたと考える。
- ・成功したことは、自分の能力や努力によって生じたかと考えるが、失敗したことは、運が悪かった、もしくは状況が悪かったなど、自分以外の要因によって生じたかと考える。
- ・自分が得られる利益を重視して、どのような行動をとるか決定している。
- ・思いかけず、もしくは意に反して行ってしまったことについても、自分の行いを正当化しようと、自分の行動に合わせて意見を変えることがある。

注) Kambara (2017) に倣い、Pronin et al. (2002) で用いられた8つのバイアスの中で、日本人においてまだ知見が蓄積されていない「hostile media bias」(Vallone Ross & Lepper, 1985) を除外した7つのバイアスを用いた。